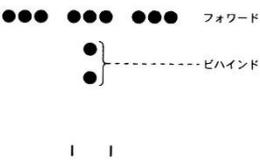
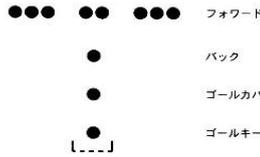
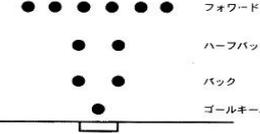
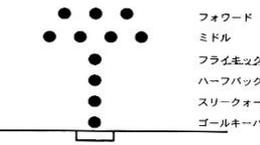
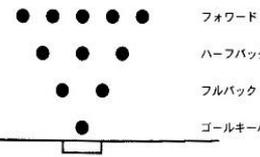
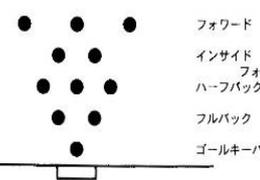
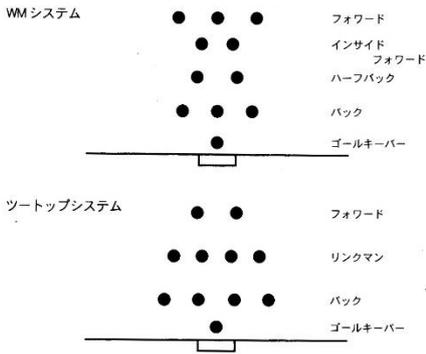


(1) サッカーの技術・戦術の変遷

スポーツの技術や戦術はルールによっても大きく制約されます。

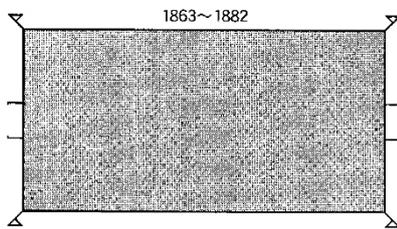
<p><b>【ドリブル戦法からパス戦法へ】</b></p> <p>1860年代の攻撃システム</p>  <p>フォワード ビハインド</p>	<p>トマス・ヒューズの著書、《トム・ブラウンの学校生活》(1857年)のなかに、蹴られたボールが(ドサツ、ドサツと鈍い音: you hear the dull thud thud of the ball)をたてて落下すると述べたところがある。この表現からは、動物の膀胱を革袋でおおったボールが軽快にバウンドすることも、勢いよく転がることもなかったらしい様子が想像され、このころのサッカーが、<u>ドリブルを中心的な技術とせざるをえないものであったことが想像される。</u></p>
<p>1860年代の攻撃システム</p>  <p>フォワード バック ゴールカパー ゴールキーパー</p>	<p>フットボール協会のルールは1866年まで、ボールの前方にいるプレイヤーがなんらかのプレイをした場合、これをオフサイドであるとしており、このようなルールとボールの性質とによって、当時の技術や戦術は、<u>ドリブルのうまいプレイヤーでフォワードを構成し、相手ゴールめがけて直線的に突進するものにならざるをえなかった。</u></p>
<p>1872年代のスコットランドのシステム</p>  <p>フォワード ハーフバック バック ゴールキーパー</p> <p>1872年代のイングランドのシステム</p>  <p>フォワード ミドル フライキック ハーフバック スリークオーター バック ゴールキーパー</p>	<p>1872年11月30日、イングランドの代表チームは、グラスゴーでスコットランド代表チームと対戦した。この時、スコットランドチームはスピードのある巧みなパスを多用してイングランドチームを苦しめ、このとき以降、サッカーはドリブルよりもパスプレイを中心にその攻撃法を構成する時代に移り、<u>フォワードのショートパスによる攻めが重視されるようになった。</u>またこの時、スコットランドチームの用いたフルバックを2人にする守備隊形が効果的であったことから、その後多くのチームがこれを採用するようになった。</p>
<p><b>【キック&amp;ラッシュ戦法からロングパス戦法へ】</b></p> <p>キックアンドラッシュに対する防衛システム</p>  <p>フォワード ハーフバック フルバック ゴールキーパー</p>	<p>フットボール協会は、1866年に(攻撃側プレイヤーと相手ゴールとのあいだに、守備側プレイヤーが3人以上いればオフサイドではない)とルールを変更する。これによって、相手側グラウンド内に何人かの味方プレイヤーを残しておくか、あるいはボールよりもさきに味方プレイヤーを相手グラウンド内に走らせることが可能となり、<u>後方からこれらのプレイヤーにパスを送って相手ゴール前になだれこんでいく&lt;キック・アンド・ラッシュ戦法&gt;が可能になった。</u>攻撃技術がこのように変わると、これを防ぐために自陣ゴール前におく守備を専門とするプレイヤーの人数をふやさなければならず、<u>フォワードの人数を制限してハーフバック、あるいはフルバックなどのポジションを設定して、これを4人あるいは5人をあてるようになる。</u>しかしこのころの攻め方も、なおまだ相手ゴールにむかって一直線に、縦方向のパスを使って攻める方法が中心で、それだけに守備も容易で、得点も偶然の支配するところが大きかった。</p>
<p>ロングパス戦法</p>  <p>フォワード インサイド フォワード ハーフバック フルバック ゴールキーパー</p>	<p>こうした過程を経て考え出されてくるのが&lt;ロングパス戦法&gt;で、これはタッチライン沿いのせまい空間をスピードのあるドリブルでコーナー付近まで前進した後、ゴールラインと平行なパス(センターリング)を行って攻める方法である。このシステムは、スピードがあつて、しかもドリブルの巧みなウイングフォワードと、タッチライン付近に待っているこのウイングフォワードにロングスを送ることができるバックメンや、反対側のインサイドフォワードが重要な役割を担うものである。</p> <p>19世紀末から20世紀のはじめころまで用いられたこのシステムは、タッチラインぎわという相手チームの守りにくい空間を活用したこと、ドリブルの技術を向上させたこと、ボールが相手ゴールラインと平行に移動する横方向からの攻めを行ったこと、そしてやがてヘディングという高さを生かす新しい攻め方を生み出したことなどによって、<u>技術・戦術における時間と空間の大きな拡大をもたらしたところに特徴がある。</u></p>

【WM 型から全員攻守型へ】

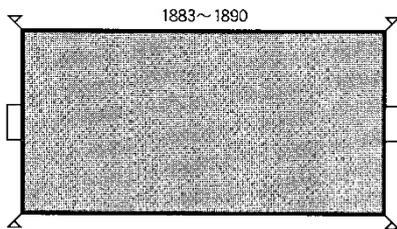


フットボール協会組織の拡大と競技会参加チーム数の増加、および観客の激増などに刺激されて、サッカーの技術・戦術はさらに急速に向上し、1925 年はオフサイドルールが 3 人利から 2 人制に変更されることによって (WM システム) が考案され、同時にそれまでのゾーンディフェンスからマンツーマンディフェンスが多用されるようになった。またパス、ドリブル、タックルなどの個人技や戦法のシステム化がさらに進んで、ボルトシステム、スーパースystem、ツートップシステムなどが考え出され、現代は、ボックスを 4 人、あるいは 5 人にふやして守備を固めるいっぽう、ボールを得るや否やボックスも攻撃に参加するという、全員攻撃、全員守備というシステムがとられるようになってきている。それだけにプレイヤーには高度のスピードと持久力が要求されるが、トレーニング方法の進歩がこれを可能にしている。

(2) ルール・グラウンドの変化



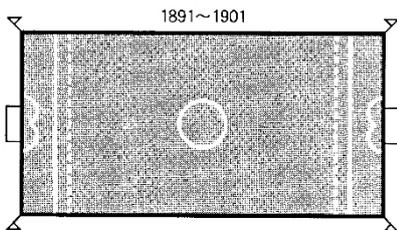
1863 グラウンドは、長さ 200 ヤード、幅 100 ヤードを最大とする。長さとは幅は旗で示す。ゴールは 8 ヤードの間隔に立てた 2 本のポールで、これらの間にテープやバーは用いない。



1866 地上から 8 フィートの高さで、両ポストの間にテープを張る。

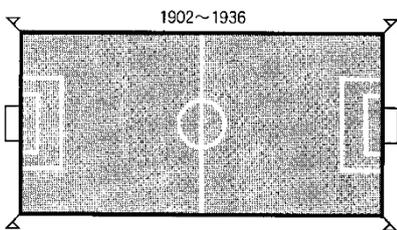
1866 ボールより前方にいるプレイヤーと相手ゴールラインとの間に、相手プレイヤーが 3 人以上いるときはオフサイドではない。

1871 ゴールキーパーは、ゴールを守るために手を使ってもよい。



1875 グラウンドは、長さ 100~200 ヤード、幅 50~100 ヤードとする。

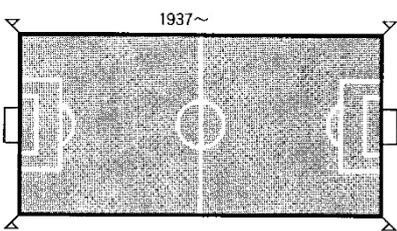
1881 試合をする両チームの合意によって 1 人のレフェリーを指名できる。レフェリーはアンパイアーの決定できなかったことに対して最終的な決定をする。またゲームの記録、競技時間の測定もレフェリーの仕事である。またレフェリーはプレイヤーの非紳士的行為に対して、アンパイアーの前で注意を与えることができ、相暴な行為に対しては退場を指示することもできる。



1883 スローインは、ボールを両手で頭上に持ち、グラウンドの方向にからだを向けて投げ入れる。

1883 ボールの外周は 27~28 インチとする(ただしこのルールは 1872 年より実施されていた)。

1887 ゴールキーパーは、ゴールを守るために、自陣側のグラウンド内でなら手を使ってもよい。ただしボールを持ちこんではならない。



1888 ボールの重さは 13~15 オンスとする。

1891 ゴールポストから 6 ヤードの区域を明示し、ゴールラインから 12 ヤードの所に線を引く(後のゴールエリアラインと、ペナルティエリアラインとなる)。

1891 守備側プレイヤーが、ゴールラインと 2 ヤードラインの間で故意に相手に足をかけて倒したり、捕ったり、また意図的にボールに手をふれたりした場合、レフェリーは相手チームにペナルティキックを与える。このキックは、12 ヤードラインのどこから行ってもよい。

1897 ラインズマンは 2 名指名され、ボールがアウトオブプレーになったときを決定し、どちらのチームがコーナーキック、ゴールキック、スローインをすべきか指示する。

1897 競技時間開は 90 分とする。